

## OLD FACES の幕が開く

吉田萌とルカ・ヴェジェッティに初めて会ったのは2017年秋、横浜能楽堂でのこと。能の「翁」や「羽衣」などを着想源としたヴェジェッティ原案・構成・振付のコンテンポラリーダンス作品『左右左』のゲネプロを観て、壮大なスケールの時空にミニマルで美しい構造を与えるその手腕に感激し、面識もないのに終演後に話しかけに行った。意気投合して、ほどなく世田谷美術館での「ブルーノ・ムナーリ展」(2018年)に合わせた新作パフォーマンスの構成・振付を委嘱、その舞台美術を作ってくれたのが吉田だった。ダンサーが手に持って操るシンプルで繊細なオブジェ、それが絶妙に気まぐれで意地の悪い動きをすることに心奪われた。以来、ある意味で好対照をなす資質を備えながら素晴らしいコラボレーションを展開するふたりの活動に魅了されてきた。

TAGA2での2人展の計画は、1年ほど前に聞いていた。世田谷美術館のエントランスホールを能舞台にするというヴェジェッティの野心的な試みを、コロナ禍のさなかでやりおおせたあとである。未だかたちを成していない、想像力のなかの演劇、劇場の姿を見せたいと彼は熱く語り、そこで使われる仮面を私が作るのだと吉田はワクワクしていた。モチーフは何かの動物。吉田には〈蛙犬〉というシリーズがあって、幼少期の吉田自身の恐怖を源泉に生まれてくるその異形の者たちは、なぜか飄々としたエロティシズムを湛えながら突っ立っている彫刻である。今度は仮面、さてどうなるだろうか。能はもちろん、世界各地の仮面劇に詳しいふたりだが、魅力的なテーマだけに難しい。

2人展のポスターに使われるという作品の画像が送られてきた。ファイルを開いたら、眩暈がするほど遠い場所に一瞬で連れ去られた。その遠い場所では風が吹いている。次の瞬間、モニタの前に引き戻された自分の頬を、その風は撫でて去って行った。展覧会タイトルはOLD FACESとある。解剖学者・三木成夫の特異なイマジネーションをなかだちに、羊水に浮かぶ胎児に潜んでいる数億年の脊椎動物進化の歴史を、吉田は7つの動物の顔として探りあてたらしかった。ヴェジェッティは解剖学にまつわる古い版画にジェッツを塗り、その上に潔い軽快さで線を引いている。仮面たちの舞台上での動きの指示書である。風はどうやら、彼らの所作が生み出したものようだった。すでにそこに劇場はある。幕が開く。

OLD FACESの上演中はひっそりと時空が歪むのではないか。TAGA2が持ちこたえるとよいが。

塚田 美紀 (つかだ・みき) / 世田谷美術館学芸員